In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	宋代の紹興園林と園林生活
Author	庄 涵淇
Citation	都市文化研究. 23 巻, p.154-166.
Issue Date	2021-03
ISSN	1348-3293
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学院文学研究科 ： 都市文化研究センター
Description	研究ノート
DOI	10.24544/ocu.20210421-004

Placed on: Osaka City University

Osaka Metropolitan University

都市文化研究 第23号 2021年3月154-166頁
Studies in Urban Cultures Vol. 23, March 2021 pp. 154-166

◇研究ノート◇

宋代の紹興園林と園林生活

庄　　涵　淇

◆要　旨

紹興は江南地域の発達した都市として，悠久の歴史文化を誇っている。浙東運河を含み，発達した水路交通が紹興の経済の繁栄をもたらした。優れた自然風景及び著名な景勝地は，紹興の私家園林の発展にとって良好な条件をもたらすこととなった。春秋時代から六朝時代を経て，明末になると，紹興の私家園林が最盛期を迎える。しかし，その間にある宋代，特に南遷後の南宋の時期において，紹興は重要な政治・経済の中心地となるが，その時代の私家園林については十分に考察が及んでいない。

本文では，宋代紹興の私家園林の特徴ならびに機能について考察を行い，以下の結論を得た。紹興は南宋の浙東地域の中心地というだけではなく，皇陵の所在地でもあり，また交通が発達し，仏教文化と蔵書文化が花開いた都市である。私家園林のデータを整理した結果，会稽県・山陰県・新昌県に多くの私家園林が集まっており，自然風景に頼ることを共通の特徴とするが，特に新昌県は宋代の紹興府内において教育の熱心な地域であり，この雰囲気が当地の私家園林の構造や機能に溢れている。また，沈園のような愛情物語によって知られる私家園林が紹興の私家園林の看板となり，現在に至っても著名な遊覧地の一つとなっている。これらの私家園林は上記の紹興の特徴と密接な関係を有しており，私家園林と南宋の経済・文化の発達との連関性を示してくれる。

キーワード：宋代紹興，私家園林，園林生活，蔵書文化，教育事業

はじめに

園林は社会文化や経済発展の産物として，園林の発展が歴代の時代及び文化に反映していく。園林研究は中国社会文化史研究における重要な糸口である。園林は皇家園林・寺院園林・私家園林などの種類に分けられる。私家園林の中で，江南の園林がよく知られている。江南の私家園林は宋代に盛んになり，園林記などの史料も多く残されている。しかし，本文の研究対象となる紹興の私家園林は明中期以後に最盛期を迎えるが，宋代においてはそこまで繁栄していなかった。とはいえ，宋代は私家園林の重要な発展期であり，明代に最盛期を迎える基礎が固められた。この時期の紹興の私家園林の実態を明らかにすることは，後世への文化的伝承や園林の発展史を明確にすることにつながるであろう。

また，紹興は歴史文化の名城として知られており，宋代浙東地域の政治・経済・文化の中心地であった。このことは，私家園林の発展に有利な環境を提供したと思われる。紹興における園林の発展は春秋時代から始まり，六朝時代に盛んになり，明末になると最盛期を迎えた。その発展は各々の時代背景と関わっている。春秋の范蠡が作成した一連の宮台苑囿は紹興の早期の皇家園林の雛形と見做されている。六朝時代に入ると，社会の動揺が士大夫の隠逸思想を促進させ，当時の江南の大都会であり，自然の山水風景に恵まれた紹興に，人々の眼が集まり，園林が数多く作られた。例えば，王羲之の蘭亭においては，士大夫たちが曲水の宴を開催し，後世に至ってもしばしば模倣された。このような隠逸思想と山水風景とが融合し，それを継承したのが唐代園林である。李浩（1998）によれば，唐代の紹興の私家園林は15箇所あげられている。ちなみに，同時代の蘇州の私家園林は11箇所，杭州は8箇所，湖州は18箇所であった[1)]。それらの園林の構造は単純なものであり，園林主の多くも隠士であった。また唐代には，多くの詩人が浙東に遊歴のため訪れたことがあり，詩作を数多く残している。このような文化の交流が後の時代に大きな影響を与えることとなった。明末になると，紹興園林の数は蘇州と匹敵するようになり，それと同時に，祁彪佳の「寓園」のような名園が造られ，「越中園亭記」のような紹興園林を記載する専門的著作も出現した。このような明代の紹興園林の繁栄と比べると，宋代はいささか遜色がみられる。しかし，南宋は紹興にとって重要な時代の一つであった。建炎四年（1130），宋高宗が越州（＝紹興）に

駐蹕したこともあり，越州は南宋において大都市となる。

この大都市で私家園林がどのように発展していたのか，まず先行研究を整理しておく。張斌（2011）は事例を挙げながら各時代の紹興園林の発展の特徴を分析している。即ち，先秦から春秋戦国時代は紹興園林の起源となる時期であり，越国の苑囿が紹興園林のはじまりと見做される。この時代の園林は皇家園林である。秦漢から魏晋南北朝に至ると，経済の発展と同時に紹興園林の造営が活発化する。魏晋南北朝の門閥士族が山水美景に惚れ込み，紹興の私家園林の発展を促進した。唐宋時期に紹興の私家園林がさらに発展し，私家園林が郊外から城内に発展する傾向が見える。さらに，寺院園林も多く現れた。そして，明代に造園活動が盛んになり，紹興の私家園林が最盛期を迎え，紹興は江南の園林数の最も多い都市となった。この時期に造園技術は成熟していった。しかし，清代に入ると紹興の経済・政治・文化や旅行などの面からいえば，明代より低下する。園林の発展，造園技術も前代と比べものにならない[2]。また，呉立威（2003）は園芸という視点から検討し，上記の研究と同じく紹興園林の発展過程を分析した上で，自然風景を重視し，花木景観が豊富で，素朴さを有する特徴を論じている。また，紹興園林に紹興の歴史・文化・民俗の反映を見出すことができると主張している[3]。邱志榮（2008）は紹興園林の発展史を究明した上で，山水園林が紹興園林の主なパターンであると指摘した。そして，紹興の川・湖・運河などの水資源を紹介して，紹興園林と水との深い関わりを論じている[4]。

以上の先行研究はマクロな視点から紹興の園林の発展史及び特徴を分析している。また，宋代は紹興園林が盛んになる時期と主張した。以上のように，宋代は私家園林の重要な発展期であり，この時期の園林を中心とする研究が必要と思われる。宋代の私家園林の実態を考察しなければ，次の明代に盛んになる理由が明らかにされない。宋代紹興の私家園林の特徴について山水風景に頼ることが指摘されているが，園林主の身分，分布の様子など，さらに分析の余地がある。先行研究では園林に関するデータの整理が不十分であるため，本稿では宋代紹興の私家園林を改めて整理した上，その実態を解明していくこととする。

1. 宋代紹興の概況

(1) 政治経済的背景

(a) 南宋浙東の中心地

駐蹕彌年，定中興之業，羣盗削平，強虜退遁。於是用唐幸梁州故事，陞州為府，冠以紀元。大駕既西幸，而府遂為股肱近藩，稱東諸侯之首。地望蓋視長安之陝洛，汴都之陳許，所命牧守，皆領浙東安撫使[5]。

（高宗の）駐蹕から一年を経て，南宋政府は国家を復興し，群盗を平定した。そこでかつて唐徳宗が梁州に逃げた後，興元元年に改元し，梁州を興元府に変更する詔を下した事例を踏まえて，越州を紹興府に昇格させた。高宗はその後杭州へ移り，紹興府はそこで股肱の重鎮となって，浙東諸侯の首と称された。長安の陝州・洛陽や，開封の陳州・許州に準じ，知州はみな浙東安撫使を兼任していた。このように，紹興府の政治的地位は他の州府より高く，また浙東地域の軍事上の重要拠点でもあった。

(b) 皇陵所在地

南宋の皇陵は紹興府東南三十五里の稽北丘陵の宝山に位置する。宋哲宗の昭慈聖献皇后孟氏が紹興で亡くなり，そこで会稽に陵墓の場所を定めた。その後，南宋の六名の皇帝が相次いでそこに埋葬された。即ち，高宗・孝宗・光宗・寧宗・理宗・度宗であり，現在は「宋六陵」という。

(2) 自然文化的背景

(a) 山水優美な景観と発達した交通

紹興の山水は昔から有名であり，王羲之は「山陰の道を歩けば，まるで鏡の中を泳いでいるようである」と述べている[6]。また，顧愷之が人に会稽山を紹介する時に，「美しい山並みが競うようにそびえたち，谷川が先を争って奔流し，草木はその上を覆い，まるで雲や霞がたなびいているようである」と述べた[7]。これらの史料より紹興の山水の優美な様子が窺える。

また，紹興の河川には，曹娥江・浦陽江・錢塘江などがある。その他，浙東運河も重要な水路である。蕭山から山陰までの運河は東晋時代に修造され，上虞地区の運河は唐代後期に，会稽地区の運河は宋代に完成した。物資を運送するほか，海外貿易にあたっても重要な水路となった。特に宋代になると，明州（のちの寧波）を経由して貿易を行う人々は浙東運河を利用して内陸と連絡を取っており，紹興は交通の要衝となった。

(b) 仏教信仰

紹興の仏教信仰は後漢に遡ることができる。南北朝時代には，数多くの寺院が造営された。その影響を受けて，後の時代にも多くの寺院が造られた。それに伴い，大量の石が採掘され，岩石が削りだされた部分は特色のある自然景観となった。例えば，著名な東湖石壁，柯岩雲骨，羊山怪石等である。

(c) 印刷業発達，蔵書豊富

紹興は宋代を代表する出版文化が発達した地域である。特に南宋になると，官刻が発達した。北宋の官刻は国子監において主として行われたが，南遷後，臨安に国子監を改めて建てると共に，中央，地方の機関も積極的に書籍の印刷に参与した。当時，紹興に駐屯した両浙東路茶塩司・転運使司・提刑司などの機関，そして紹興府，府学なども多くの書籍を印刷しており，主要な刻書地域の一つとなった[8]。

また，刻書が盛んであったことに伴って，紹興には蔵書家が多かった。

越藏書有三家，曰左丞陸氏，尚書石氏，進士諸葛氏。中興，祕府始建，嘗於陸氏就傳其書。而諸葛氏在紹興初頗有獻焉。可以知其所蓄之富矣[9]。

紹興十三年，始建秘書省，於臨安天井巷之東，仍詔求遺書於天下，首命紹興府録朝請大夫直秘閣陸宰家所藏書來上，凡萬三千卷有奇[10]。

先是，有是布衣諸葛行仁，亦会稽人，進所藏書八千五百四十六卷[11]。

（石氏）築堂名博古，藏書二萬卷[12]。

紹興には左丞陸氏（陸佃），尚書石氏（石邦哲），進士諸葛氏（諸葛行仁）の三大蔵書家がいた。紹興十三年（1143），秘書省が天下の遺書を求める詔を下し，朝請大夫直秘閣陸宰（陸佃の息子）の蔵書を書き写して呈上することを命じたが，蔵書は一万三千巻余もあった。諸葛氏も紹興初に蔵書八千五百四十六巻を献上し，石氏の蔵書も二万巻に至り，「博古堂」という蔵書楼を造った。

(d) 橋文化

紹興は内外を水路がめぐり，橋の街とも呼ばれている。『嘉泰会稽志』に記載された宋代の橋の数は 201，『万暦紹興府志』に記録された橋は 382 になり，『乾隆紹興府志』に載せられた橋は 551 にのぼった。時代を下るとともに橋の数が増加していることが分かる。

以上，宋代紹興の概況を論じた。以上を踏まえて次に，宋代紹興の私家園林の特徴を述べることとする。

2. 宋代紹興の私家園林の概況

(1) 本論の研究対象について

まず，本論文で用いる園林の範囲を明らかにする。

陳從周（2007）は「中国の園林は建物，山水，花木などの要素で組み合わせた総合的芸術品である」と述べている[13]。園林の定義について，筆者は拙稿「宋代園林研究の現状と課題」で論じたことがある[14]。つまり，初期の先行研究において園林の概念が述べられているが，ほぼ如上のような定義を行っていた。ただ，研究を通観していくと，園林概念の範囲は次第に広くなっており，「広義の園林は，定められた区域の中で，自然山水，地形或いは人工的に開かれた山水の地形を利用して改造し，植物の栽培と建物の配置を適合させて，人が観賞，息抜き，居住ができる環境を提供する場所のことである。それに対して，狭義の園林を定義すれば，即ち，伝統的古典園林を指す」という曹林娣（2005）の定義が最も適切と考えられる[15]。また，李浩（1998）は更に具体的なやり方で自分の研究対象を定めた。氏は唐代私家園林の名称を「園林，林園，別業，別墅，別館，別廬，山林，山莊，山池，山亭，山齋，山第，山邸，山園，山居，幽居，閑居，溪居，隠居，林亭，林館，園亭，水亭，溪亭，池亭，水閣，亭子，草堂，茅茨，茅堂」と列挙した[16]。また，李氏が園林名称の多様性を指摘している。その考えに踏まえて，筆者は一つの建物が園林になるか否かを判断する時，名称は参考になるが，それだけにこだわる必要はないと考える。その建物の内部構造，機能などの要素も，私家園林と同様に考察しなければならないと考えるからである。

以上を踏まえて，紹興園林について表 1 園林表をまとめた（以下，表と略記）。表には，「石鼓書堂」「平波書堂」「平山書堂」なども収録した。それらの「書堂」は名前だけをみれば，必ずしも園林に組み入れるべきものではないかもしれないが，それぞれの史料を確認すると，書堂には亭・池・堂などの建物が配置される。また竹・柏・蓮などの花木もあり，私家園林の要素が揃っていると考えられる。そのため，これらの「書堂」も本論の研究対象の範囲とした。

(2) 宋代紹興の私家園林の分布とその特徴

宋代紹興の私家園林は主に会稽県，山陰県そして新昌県に分布する。表によれば，会稽県が 6，山陰県が 7，新昌県が 9，上虞県が 1 である。残りの三つは場所が不明である。また，紹興の私家園林分布図を見ると，城外の園林が多数を占めている。府城から離れた新昌県に私家園林が多く造られた。その理由を考察すれば，おそらく二点あると考えられる。

①有名人の足跡が残されるため，後世の人々の関心を集めた。例えば，王羲之が「剡県の鼓山に練丹した」[17]，謝霊運が「暮れ方に剡中の宿に泊まり，明朝には天姥の峰に登る」[18]，また李白は「夢遊天姥吟留別』という詩に「謝公が身をよせた宿は今もなお在り，緑に澄んだ水がゆらめいて，猿の声が聞こえてくる。謝公の木履をはき，青雲の梯子のような，険しい道を登ってゆく」というような記録がある[19]。他に，孟浩然や杜甫などの詩人も遊歴したことがある。また，新

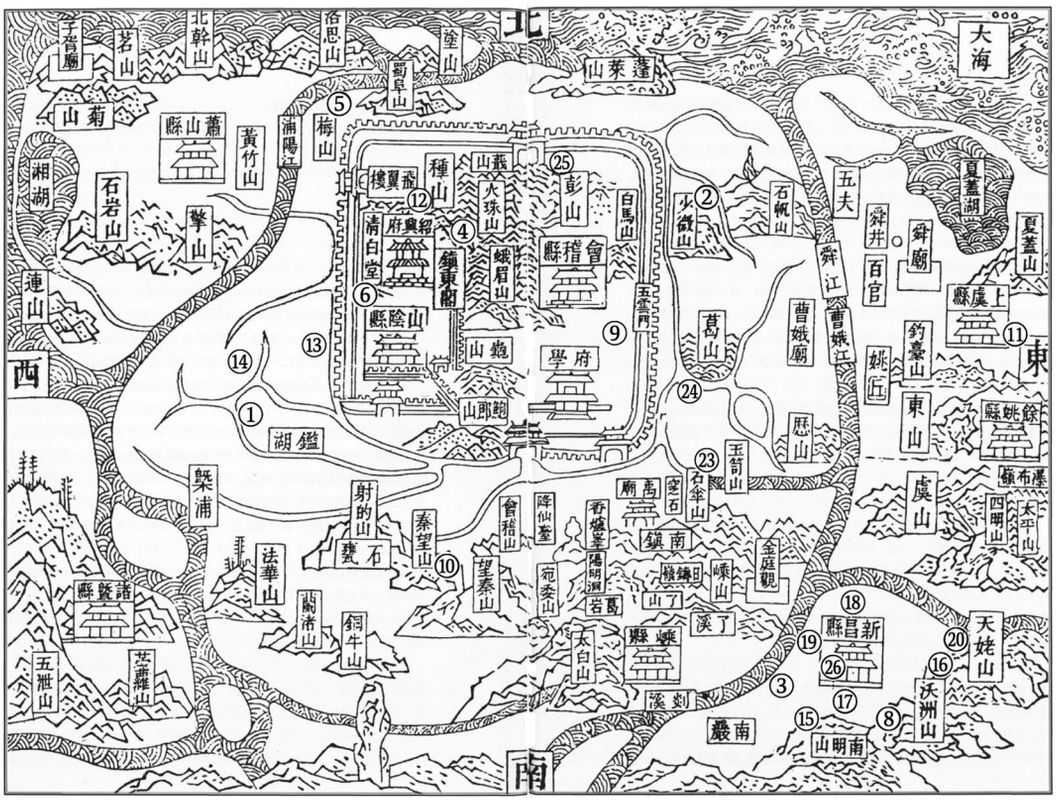

図１　紹興の私家園林分布図（宋・王十朋『会稽三賦』に基づき加工）

昌には晋の仏教高僧の集まる修行地がある。「沃洲山は県の東から 32 里のところに位置する。晋の白道猷，法深，支遁は有名な僧侶であり，名門である戴氏，許氏，王氏，謝氏の 18 人と交遊し，風雅な境地を極めた」[20] とあり，これらの名僧によって新昌県の南明山（石城山）・東峁山・沃洲山は仏学の研学の中心地となった。こうした記録が残されているように，後世の人が有名人の足跡を尋ねるため，新昌県に赴いたと思われる。

②新昌県は教育事業が繁栄していた。表を参考すれば，名儒や教育家たちが自分の読書所を造る事例が多い。例えば，石皷書堂，平山書堂などはすべて儒者の私家園林であると考えられる。詳しくはのちに述べる。

次に，紹興の私家園林は山や鏡湖のような山水風景の優美な場所に位置し，自然を追求する特徴がある。その理由として三点が挙げられる。①紹興の自然風景が優れており，借景だけで園林の景色が良くなるため，多くの装飾は必要ない。②六朝からの隠逸思想からの影響がある。③『嘉泰会稽志』巻 1，「風俗」には以下のようにある。

> 故今之風俗，好學篤志，尊師擇友，弦誦之聲，比屋相聞，不以殖貲貨習奢靡相高。士大夫之家，占産皆其薄，尤務儉約，縮衣節食，以足伏臘，輸賦以時，不擾官府[21]。

宋代紹興の風俗は，学を好み，師を尊敬し，友を慎重に選ぶ。読書の声が各々の部屋から聞こえる。商業や贅沢を好まない。士大夫の家は所有する田産が少なく，節約をして切り詰めて生活を支える。期日通りに税を納付し，官府を妨げない。このような風俗が私家園林の営造に影響を与えたと思われる。また，士大夫の保有する資産が少ないため，郊外のコストの低い場所を選んで園林を造った可能性もある。

さらに，すでに述べた紹興の蔵書家による私家園林を特徴としてあげることができる。表からみれば，陸氏と石氏は私家園林を所有していたことが分かる。范鳳書（2001）の研究によると，陸氏の蔵書は陸琮から陸佃・陸賓・陸宰・陸游・陸子遹まで，百年余り積み重なり，陸游に至って集大成し最盛期を迎えた[22]。陸游は三山別業に「書巣」という蔵書室を設置した。新昌石氏も蔵書の名家である。石待旦は新昌県石溪の山水の間に，石溪義塾を創建し，新昌県の教育事業を引き受けた。また，彼は蔵書のため「万巻堂」を建て[23]，同族の石邦哲も「博古堂」を造った。

宋代紹興の私家園林のもう一つの重要な特徴として，陸游と唐氏の愛情物語で知られる園林がある。それが沈園である。沈園は宋代において既に名園となり，人目を引いて多くの人が遊覧に訪れた。後に何度も園林主が変わったが，陸游の愛情物語が語り継がれていった。現在，一連の修復を経て，沈園は南宋私家園林の雰囲気を取り戻している。

3. 宋代紹興の私家園林と園林生活

(1) 紹興城内の名園 —— 沈園

表によれば城内に属する私家園林は 5 ある。上述の如き，南宋紹興の私家園林の中で，沈園が最も著名である。沈園は紹興府城内，禹跡寺の南に位置する。陸游と唐氏の物語に関して三つの史料が挙げられる。陳鵠『耆旧続聞』，劉克荘『後村詩話』，周密『斉東野語』である[24]。陸游と先妻は仲がとても良かったが，陸母の意に適わなかったので離婚して，先妻は別の人に嫁いだ。数年後，沈園にて二人が再会した時，陸游が「釵頭鳳」を作ったというのが物語の粗筋である。鄒志方（2008）によれば，陸游の旧邸はその祖父である陸佃の邸宅で，斜橋中正坊に位置しており，沈園より五里離れている。陸游は紹興三年（1133）に東陽から山陰に帰り，その後，雲門や城南小隠山の陸宰の別業に休暇に行ったのを除き，旧第に住んでいた[25]。

南宋の沈園の景色は詩詞の中に数多く見出すことができる。例えば，南宋の詩人趙蕃には「黄菊花残白菊花」句があり[26]，陸游には「桃花落，閑池閣」句があり[27]，また「楓葉初丹槲葉黄」，「香穿客袖梅花在，緑蘸寺橋春水生」，「只見梅花不見人」の句がある[28]。沈園には建物・池・橋があるほか，梅・菊・桃・楓・槲などの花木も揃えていた。表に掲げた，会稽東南にある「昌園」，山陰県昌安門内の「朱通直荘」及び城東「五雲梅舎」も花卉によって有名になった園林である。昌園は「有梅万余株」，朱通直荘は「佳菊数十種」，五雲梅舎は「種梅百本」とある。梅と菊が紹興で流行っていた花であることが推測できる。陸游の愛情物語には，「遣遣黄封酒果饌通慇懃」，「遣致酒肴」といった，酒と食べ物を贈る記載がある。つまり，沈園は観覧客に休憩場所を提供したことが分かる。陸游が壁に詞を題するようなことは，宋代によく見られる。かつて筆者は湖州と蘇州の園林を検討した際，葉夢得と范成大の私家園林に友人による題名，題字のような記録があったことを指摘した[29]。陸游は友人と共に沈園を遊覧した可能性がある。

史料は少ないが，沈園には亭台楼閣，小橋流水の景勝があり，花が咲き乱れていた。紹興の名園として，その景勝は蘇州などの園林と比べて，特別な所ではないが，陸游の愛情物語が現代まで伝わっている。沈園が有名になったのはその景色より，魅力的な物語が背後にあったからである。

この沈園以外，紹興城内の私家園林に関する史料は少ないため，城内における私家園林がどのように発展していたのか，どのような特徴があるのかについて詳細は不明である。しかし，

> 南渡初，南班宗子，寓居會稽為近屬，士子最盛。園亭甲於浙東，一時坐客皆騒人墨客[30]。

とあるように，南宋のはじめ，南班宗子（後述）の中に，（皇帝の）血縁関係の近い人が会稽に身を寄せて，士大夫が数多く会稽に暮らしていた。紹興は浙東地域のなかでも最も園亭が盛んになった都市となり，文人墨客が皆集まってきた。南班宗子とは，南班官職を授けられる宗室子のことである。「南班官」は環衛官の官職が付く宗室の総称であり，「南班」はこれらの宗室子が朝会に際して殿の南側に位置することを指す。南班官は実際の権力を握らないのであるが，朝会に出席するというような宗室としての基本的役割を履行しなければならない。南班官には等級が 14 あり，昇進するために考課を受けないといけない。しかし，たとえ最低層の等級の「太子右内率府副率」であっても，収入は中級官僚に匹敵する。昇進後の優遇を受けたことは言うまでもない[31]。つまり，上記の史料の「園亭甲於浙東」は確かなことだと考えられる。南班宗子の財力は園林の営造を十分賄えた。南宋において紹興の地位は高く，皇陵の所在地でもあったこともあり，皇族の園林は多かったはずであるが，現時点で明確な史料はまだ見いだせていない。ただ，先の「沈園」記事のうち，陳鵠『耆旧続聞』には「夫婦之情，實不忍離。後適南班士名某，家有園館之勝。務觀一日至園中，去婦聞之，遣遣黄封酒果饌通慇懃。」と記されており，陸游の前妻が再婚した相手が「南班士名某」であり，その家には「園館之勝」があったと記されており，南班宗室の園林保有を示唆的に述べてくれる。

(2) 会稽，山陰の私家園林

城内に比べて，城外の私家園林に関する記載は相対的に豊富である。表によればこの二県に属する私家園林は 13 ある。幾つかの事例を挙げて分析する。

斉氏家園

> 斉氏家園，在城東少微山，山甚小，而近湖。齊祖之分司東歸，遂家焉。引流爲沼，藝花爲圃。山之上下，有芳華亭，脩竹巖，眞珠泉，石屋，嘉遯亭，樵風亭，禹穴閣，應星亭，東山亭，釣閣。其自爲家山十詠，陶寫景物，語尤閑遠。今廢爲神祠，無復舊觀，惟釣閣故基猶略可識盡湖山登覽之勝[32]。

斉氏家園は城東少微山にあり，山は小さいが，湖に近い。斉唐（字祖之，山陰の人である。天聖八年（1030）に進士に合格し，知杭州富陽縣，祕書丞太常博士となり，職方員外郎をもって致仕した。熙寧七年（1074）に亡くなり，享年 87歳[33]。）が致仕した後に営造した隠居場所であった。流水を引いて沼にし，花を植えて圃にした。山の

上下には亭台楼閣が備えられている。斉唐は自ら園林の景勝をめぐって詩歌「家山十詠」を作った。景物に心持ちを託し，言葉も軽やかであった。今は廃されて神祠になり，元の姿が見えないが，ただ釣閣の旧址だけが湖山の絶景を望むことができる，と記されるように，斉氏家園は湖山の景色が見える静かな場所であったと考えられる。

適南亭

適南亭は梅山の山頂にある。陸佃は次のように「適南亭記」を書いている。

> 會稽爲越之絶，而山川之秀，甲于東南，自晉以來，高曠宏放之士多在于此。至唐，餘杭始盛而與越爭勝，見元白之稱。然杭之習俗華媚，善占形勝，而丹樓翠閣，輝映湖山，如畫工小屏，細巧易好，故四方之賓客過而覽者，往往後越，夫越之美，豈至此而窮哉？意者，江山之勝雖在，而昔賢往矣。距今千歲，幽深寂寞，殆有鬱而不發者也。熙寧十年，給事中程公出守是邦，公，吏師也，所至輒治。故其下車未幾，弗出庭戸之間，而政成訟清，州以無事。乃與賓客沿鑑湖，上蕺山，以尋將軍秘監之跡。登望稍倦，未愜公意，于是有以梅山勝告公者。蓋其地，昔子眞之所居也。今其少西有里，曰梅市，其事應史。公聞，往焉。初届佛佛刹，横見湖山一面之秀，以爲未造佳境也，因至其上望之。是日也，天和景晴，竹莖尚疎，禾葉微合，峯巒如削，間見層出。公曰：此山之佳處也。己而北顧，見其煙海杳冥，風帆隱映，有魁偉絶特之觀，而高情爽氣，適相値也。夕陽在下，不得己而後去。其山之僧用和者，契公之意，因高構宇，名之曰適南。蓋取莊周大鵬圖南之義。暇日，以衆飲而賞焉。水轉挹轉清，山轉望轉碧。而俯仰之間，海氣浮樓臺，野氣墮宮闕。雲霞無定，其彩五色，少頃百變，殆詞人畫史不能寫也。于是，闔州以爲美觀，而春時，無貴賤皆往。又其風俗潔雅，嬉遊皆乘畫舫，平湖清淺，晴天浮動。及登是亭，四眺無路，風輕日永，若在蓬萊之上，可謂奇矣。然則所謂餘杭者，未必如也[34]。

適南亭は僧侶の用和が知州の程師孟（1015－1092）のために造った亭である。程公が城外において休憩や宴会を行う場所と言える。春は庶人に開放され，民衆と共に楽しむこともできる。適南亭は程公の余暇時間を充実させただけではなく，地方統治がうまくいっていることを喧伝したと考えられる。また，陸佃が長文で紹興の美しさを描き，杭州の景色と対比した。会稽は越州の絶景であり，山水の優美は東南随一である。それに対して，杭州の習俗は華麗で，風景地を占め，色鮮やかな楼閣が湖山と互いに照り映えて，まるで屏風の絵画のように精巧である。梅山の風景を見てみれば，竹林がまばらで，葉が少し重なり合い，山並みが削られたようで，その間に浮かび上がって見える。北を眺めると，海上に船がぼんやり見える。壮大な景色である。

このような壮麗な自然景色は紹興の特徴と言えよう。それも紹興の私家園林が城外に営造された重要な理由であろう。そして，晋以来，気概に満ちた人物は多くいると主張し，王羲之の足跡を尋ねようとしたという記載から，紹興の人文歴史が長く，人々は先賢の足跡を追い求める様子がわかる。この雰囲気は私家園林の発展に促進し，影響を与えたと考えられる。

小隠山園

> 小隠山園在郡城西南鏡湖中，四面皆水，舊名侯山，晉孔愉嘗居焉。皇祐中，太守楊紘始與賓從往游，游而愜焉，問其主王氏，山何名？對曰：有之，非佳名也。亭有名否？則謝不敢。迺使以其圖來悉與之名，山曰小隠之山，堂曰小隠之堂，池曰瑟瑟之池，命其亭曰勝奕亭，曰志歸亭，曰湖光亭，曰翠麓亭，又有探幽徑，擷芳徑，捫蘿磴，百花頂，山之外有鑑中亭，倒影亭，皆楊公所自命名。而通判軍州事錢公輔又爲刻石記之[35]。

小隠山園は郡城南西の鏡湖中にあり，四面が水に臨み，元の名前が侯山である。晋の孔愉（268－342　東晋名臣）が嘗てここに居住していた。皇祐中（1049－1054），知州の楊紘（生卒不詳）が賓客と遊覧に行くと，気持ちがよく，園林図を参考して，園林及び中の建築，景勝を命名した。その後，山は小隠山とよぶようになった。そして通判軍州事の銭公輔（1021－1072）がその事を改めて石に刻んで記した。

鏡湖は有名な風景地として，多くの園林主の目を引いた。知州の楊紘が同僚及び賓客と共に小隠山園を訪ねて来たことから，小隠山園が当時の有名な私家園林であることが分かる。そして，その門を望むと，あたかも楼閣が雲や霧に浮かぶようである。その堂に入り，その亭に登ると，周囲は静かで体がこの世から離れたようである。世俗を脱した所に，緑豊かな山と谷が周りを取り囲む。珍しい花木が目の前に現れると銭公輔が記載した[36]。そこから小隠山園が備える隠逸の雰囲気が読み取れる。また，地方官が景色の良い私家園林へ遊覧に行くという交遊する姿も確認できた。前項の適南亭と合わせて見れば，地方官が暇な時，同僚や地方士大夫とよく日帰り旅行をしたと思われる。

> 後且百年浸廢弗理。少師陸公宰嘗得之，以爲別墅，作賦歸堂，六友堂，遐觀堂，秀發軒，放龜臺，蠟屐亭，明秀亭，拄頰亭，撫松亭，會公改築之城之東隅，今惟賦歸堂，蠟屐亭存焉，皆少師所扁也[37]。

上記の史料のように，百年ほど小隠山園は荒廃したままであった。その時少師陸宰（1088－1148）が園林を手に入れて，別墅とした。上記の史料から園内の建物は確認できるが，園林生活に関する史料は少なく，窺うことができなかった。しかし，陸宰の息子である陸游の園林生活については，多少確認することができる。

三山別業

陸游（1125－1210）の住居については，鄒志方（2008）のほか包偉民（2020）が陸游の浙東郷村における生活を詳細に論じている[38]。そこでは，当時の郷村社会の生活場面を復元すると同時に，陸游が郷民へ知識を伝播し，代筆などの文化活動を行ったことに言及している。陸游には紹興に複数の住所があるが，そのうち生活する時間が一番長いのは三山別業である。

三山別業についての研究成果は既に出されている[39]。三山別業は山陰県から西九里，鏡湖北岸に位置する。乾道元年（1165）に造営を開始し，乾道二年（1166）から居住していた。鄒志方（2008）によれば，乾道二年（1166）から陸游が亡くなる嘉定三年（1210）まで，彼は断続的に三山別業で 30 年ほど生活していた。鄒志方は陸游が苦労を厭わず経営した山陰の三山別業が，規模的には紹興においては優れた存在であったと指摘した。三山別業の基本的構造は次のようである。南端は「南堂」であり，四周に竹が植えられた。陸游はよく南堂で休憩していた。堂の後ろに「書巣」があり，居室兼蔵書室である。陸游「居室記」に以下のような記載がある。

> 陸子治室於所居堂之北，其南北二十有八尺，東西十有七尺。東，西，北皆爲窓，窓皆設簾障，視晦明寒燠，爲舒卷啓閉之節。南爲大門，西南爲小門，冬則析堂與室為二，而通其小門以爲奥室，夏則合爲一室，而闢大門以受涼風[40]。

堂の北側に室を造り，東・西・北側に窓がある。寒暖に応じて開閉する。明るい部屋だと思われる。南に大門があり，西南に小門がある。冬に（大門を閉めて）堂と室を二つの部分に分けて，小門を奥室として使う。夏になると，合わせて一室にする。大門を開いて涼風を通過させる。このように，部屋の使いやすさがわかる。また，「書巣記」に居室の内部空間と陸游の日常生活を記載している。

> 吾室之内，或栖于櫝，或陳于前，或枕藉于床，俯仰四顧，無非書者。吾飲食起居，疾痛呻吟，悲憂憤歎，未嘗不與書俱。賓客不至，妻子不覿，而風雨雷雹之變，有不知也[41]。

本は本箱に保存されたり，目前に陳列されたり，或いは乱雑にベッドに置かれている。四周を見渡せば，本しか見えない。飲食などの日常生活を過ごす時，病気で呻く時，機嫌悪く憤慨する時，本と一緒にいない時はない。賓客が訪れず，妻と子供と会えず，悪天候であっても関係ない。このような陸游の晩年のライフスタイルの一面を確認できる。このような生活は，有名な蔵書をもつ陸氏の家柄に相応しい。

また，蔵書室に言及する詩作もある。例えば「茅屋三四間，充棟藏經史。平生喜藏書，拱璧未為寶」[42] は蔵書室の三，四部屋の規模を説明している。堂の東に避暑用の小室がある。堂の後ろに庭があり，庭の後ろは正堂の「漁隠堂」である。左右に室あり，子孫の居室である。正室に暖閣が設置される。そのほか，これらの家屋から離れる「昨非軒」と「老学庵」がある。老学庵の周りに竹を植え，窓前に梅があり，庵の北側に築山があり，山の下に水がある。「竹間僅有屋三楹，雖號吾廬實客亭。自註：小庵才両間。」[43] つまり，三軒の部屋のうち庵は二軒を占め，残りの一軒は「亀堂」である。亀堂も陸游の晩年の起居地である。そのほか，東南西北に四つの園林がある。西園は薬草園で，北園は菜園，東園は花園で，中に「水亭」があって剡曲の傍にある[44]。南園には胡麻を植え，「下鷗亭」があり，鏡湖に臨む。西山の北側の麓に「茅亭」がある。園中には小渓・池・泉・築山・盆栽などが設置されていた[45]。

三山別業は機能の多い私家園林である。自然環境の良さと父親への思いと関係するかもしれないが，小隠山園と同じく鏡湖の周辺に位置していた。しかし，小隠山園とは異なって三山別業は田園のような感を抱く。菜園や薬草園などは経済的実用性もあると考えられる。それは陸游の経済的状況と関係している。陸游の官途には挫折が多かった。『宋史』によれば，

> 陸游字務觀，越州山陰人。年十二能詩文，蔭補登仕郎。鎖廳薦送第一，秦檜孫塤適居其次，檜怒，至罪主司。明年，試禮部，主司復置游前列，檜顯黜之，由是為所嫉[46]。

とあり，陸游の才能が秦檜の家族の利益に影響したため，秦檜に排斥され，科挙試験が合格できなかった。陸游が秦檜に嫌われた理由はもう一つあると考えられる。陸游の父親である陸宰は愛国思想があり，主戦派の人とよく交遊していた。そのため，秦檜に排斥されたのであろう。

> 李莊簡公泰發，奉祠還里，居于新河。先君築小亭曰千巖亭，盡見南山，公來必終日。嘗賦詩曰：家山好處尋難遍，日日當門只卧龍。欲盡南山巖壑勝，須來亭上少從容。每言及時事，往往憤切興歎，謂秦相曰咸陽（中略）泰發談笑慷慨一如平日，問其得罪之由，曰不足問，但咸陽終誤國家耳[47]。

李莊簡（李光 1078－1159）は陸宰を訪れて，千岩亭で

終日時事を討論することがよくあり，秦檜が遅かれ早かれ国を危険にさらすであろうと秦檜を批判した。当時の人は秦檜を「咸陽」と呼び，彼の金国に媚び諂うことを風刺した。陸游はこのような雰囲気で育てられたため，秦檜に排斥されたことは当然であろう。

父親及びその知人の影響を受けて，官途不順であっても陸游は金と戦う主張を終生変えることはなかった。鄒志方（2008）が陸游の三山別業における生活を次のようにまとめた。即ち，詩書に理想を託し，隣人と交遊し，子孫を教育し，後輩の詩人を育成し，飲酒して琴を弾き，医薬を施し，そして道学に専心した。陸游は芸術・学術と生活をうまく融合させ，田園のような私家園林を創り上げたのである。

以上の事例を見た上でまとめれば，山陰・会稽周辺の私家園林は素朴であり，自然風景を利用し，園林建築を自然に融合させることが分かる。造園思想は六朝からの影響が大きい。三山別業は自分なりの特徴があり，陸游が詩人として，薬草園や菜園のような農園，築山，盆栽のような芸術品を違和感なく園林空間に配置するなど，南宋紹興において特別な存在であったと思われる。

(3) 新昌の私家園林

前文で少し言及したが，新昌県は教育事業と蔵書文化が発達した。それについて山口智哉（2007）による優れた研究成果が出されている[48]。新昌県において影響力が大きいエリートとして石氏と陳氏が挙げられる。石待旦（985－1042，字秀平，号石城先生）は咸平年間（998－1003）に石溪義塾を創建し，万巻堂という蔵書楼を設置した。また，程顥（1032－1085）を迎えて教鞭を取らせたこともある。石氏一族は両宋の間に，状元 3 人，榜眼 2 人，進士 42 人，官僚になった人は 120 人余という数多くの人材を輩出した。一方，陳氏義塾は南宋中期に陳祖らによって創立された。陳祖は郷里の若者を教育するために，名儒であり丞相でもある王爚（1199-1275）などの人を迎えて講学活動を行った。

南宋中期に至ると，紹興府の科挙合格者が多くなった。紹興府が管轄した 8 県のうち，蕭山と余姚を除き，残りの 6 県の及第者は合計 618 人，内訳は北宋 185 人で，南宋 433 人であった。新昌県の及第者が最も多く，123 人であり，その次は会稽と山陰県，合計 220 人である。

その上，宋代では各学派が相次いで盛んになり，紹興もその影響を受けて，著名な学者が出現した。例えば，斉唐（997－1074），新学学者陸佃（1042－1102），朱，陸両方の学術に関心を寄せた石墾（1128－1182），事功之学に傾く黄度（1138－1213）等がいる[49]。

表によれば，新昌県には「石氏山斎」，石亜之「石鼓書堂」，王爚「王家園」，黄度「愛山亭」，黄庭「黄氏山堂」，黄庚「平波書堂」，章一経「平山書堂」，石茂誠「渉趣園」，陳雷「水竹所」の 9 つの私家園林がある。園林主の多くは教育事業に関係する。

石氏山斎

石氏山斎の主人について確たる記録はないが，年代的に見れば，石待旦である可能性が高い。晏殊（991－1055）は嘗て「留題越州石氏山斎」を書いた。

> 書仙十閣壯儒宮，靈越山川實抛雄。岫柏亞香侵幾席，巖花回影入簾櫳。千秋碧鎖東南竹，一水清含旦暮風。文酒雅宜頻讌集，謝家蘭玉有新叢[50]。

「儒宮」は石溪義塾を指すと思われる。晏殊が石氏を南朝の謝氏になぞらえ，山の上に柏の香りが部屋に運ばれてきて，岩の上の花がカーテンに映したような風景であると紹介した上，竹・清水・蘭の間で宴会を開き，飲酒作詩の様子を描いている。石氏山斎は義塾にとどまらず，雅集をよく行った私家園林と思われる。

石鼓書堂

石鼓書堂は県西の石鼓山の南に位置する。太常博士石亜之の読書所である。嘗て異人に出会い，丹薬をもらった。食べずに，池に投げいれたら，蓮が咲いて魚が飛び跳ねたという道教的な色合いの強い伝説が残される[51]。景祐三年（1036），朝散大夫章驤が「石鼓主人記」に以下のように記載した。

> 石鼓之下有井焉，井曰石井，千仞碧泉而瑞蓮飄香；有池焉，池曰硯池，半畝方塘而飛魚跳躍。左右前後，佳山秀水之盤旋，中建一堂，以為棲息藏修之所者，石公也。汲石鼓之泉以為飲，樵石鼓之木以為炊，蠶石鼓之桑柘以為衣，群石鼓之麋鹿以為友[52]。

石鼓書堂に蓮の香りが溢れ，硯池という小池に魚が飛び跳ねる。一つの堂が山水の真ん中に建てられ，この堂を休憩しながら勉強する場所として利用した。石亜之が読書のほか，農業をしたり，蚕を飼ったり，鹿の一種であるシフゾウを飼育していた。

書堂という名前を付けたが，荘園のような存在であった。石亜之の園林生活から，隠居した士大夫たちの日常生活の一面を確認できた。

王家園

> 王家園，在縣南長潭之上，宋丞相王爚所居。中有沂春亭，蒼雪觀，答春堂，閑遠樓，鴟夷舟，康干石林。景物絶勝[53]。
>
> 王爚字仲潛，一字伯晦，紹興新昌人。登嘉定十三年進士第，任左丞相兼枢密使，進平章軍国重事[54]。

王爚（1199－1275）は宋寧宗・理宗・度宗及び恭帝

時期の重臣であり，儒者としても有名である。それに，王羲之の後裔でもある。王家園は新昌県でも相当に贅沢な私家園林である。県南の長潭に位置して，中に，亭台楼閣などの建物のほか，「康干石林」という特別な景勝がある。「康干石」は拔野古（匈奴の後裔である遊牧民族の鉄勒の部族の一つ）の東北から千里余り離れる康干河に産出される樹木の化石である。松を康干河に投げ入れたら，2 年を経て木が石になり，色が青く，化石になった後，松木の紋様が付くという[55]。王爚はこのような松石を愛し，収集して園林に置いて，その場所を康干石林と呼んだ。また，王爚は先祖を継承するため，王家園に曲水の宴の景勝を復元した。「今廢弛之餘，尚有緩山及流觴曲水，遺跡宛然」[56] とあるように，園林が荒廃になった後，曲水の宴の遺跡がまだ残っていた。

紹興の私家園林の多くが山水風景に頼った素朴な特徴をもつのと異なり，彼の私家園林は人工的な設計（康干石林・流觴曲水など）を重視することがわかる。そこから王氏の豊富な財力や文人趣味が見えると同時に，南宋の紹興の私家園林が贅沢になり，造園技術が発展する傾向があると言えよう。すでに南宋朝廷の混乱していた時期であったから，王氏の住居の華美な様子に対して後世の人々から批判も受けた。

平山書堂

> 平山書堂，在縣西獨秀山之麓，宋儒章一經讀書之所，對石皷山。今其子孫蕃衍，有屏山堂，耕讀園，橘軒，遯莊，竹外溪山樓，怡老堂，平山小隱，鮮元坊，貞愛堂，棲碧樓，拱北堂[57]。
>
> 宋章一經，字清之，冨于貲而能謙約，愛人好施，篤志問學。建平山書堂，聚書千卷，延文行之士，主師席，教子孫，絃誦不絶，立家規以肅内外，其後，子孫科名相繼[58]。

平山書堂から見れば，園林は大きく見える。また章一経は南宋では有名な儒者として知られ，蔵書千巻とあるように，平山書堂には蔵書楼があったと考えられる。また，子孫の教育に努め，家族の規則を定めることによって，しっかりと家を治めることができた。その後，子孫も相次いで及第した。

湖州の私家園林には書院の名前が付けられる建物や蔵書楼を設置する事例が多く，子孫の教育と蔵書に執心する特徴があり，平山書堂は湖州の私家園林によく似ていると考えられる。造園，蔵書，子孫教育が南宋の士大夫の一般的生活理念になるのであろう。

以上，新昌県の園林事例を整理した。新昌県は理学の影響を受け，教育事業が発達していた。それは新昌石氏や陳氏などの地元の人々によるが，また朱熹とも密接な関係がある。朱熹は何度も新昌に来たことがある。そして，朱熹は石塾（1127－1182）と交遊していた。『南明石氏宗譜』には朱熹の書いた序文があり，石塾のために「克斎記」も執筆した[59]。また，二人が東岩山水簾洞に一緒に遊覧したことがあり，詩作が残された[60]。他に，朱熹が石宗昭や石斗文（1129－1189）としばしば理学について講論したという。教育家や儒者が交流しながら教育事業を推進すると同時に，自分の文人趣味を託す場所を探し，読書所を営造した事例が多かった。新昌県の私家園林の名前から見れば，「書堂」「山斎」という名がつけられたのは園林主の教育家としての身分に関わるほか，六朝の隠逸思想を受け継いだものと考えられる。山陰，会稽の山水美景だけを重んじて追求することとは異なり，新昌県の私家園林は教育機能と文人趣味が強いものであったと見るべきである。

終わりに

紹興は南宋の浙東地域の中心地だけではなく，皇陵の所在地でもあり，また交通が発達し，仏教文化と蔵書文化が繁栄した都市である。自然の風景が優れているため，宋代紹興の私家園林の多数は紹興府の城外に造られ，質素な自然の山水を活かしたものである。六朝の隠逸思想は紹興園林に深く影響を与えて，自然と融合した道学思想の影響を受けた私家園林も発現する。城外の私家園林のうち，陸游の三山別業は田園の「別荘」のような存在であり，詩人としての彼は，薬草園や菜園のような農園，築山，盆栽のような芸術品を違和感なく園林空間に配置するなどして，文人趣味と農業生活を上手く融合できたと言えよう。

それに対して，紹興城内の私家園林に関する史料は少なく，特徴は不明とせざるを得ないが，愛情物語によって有名になった沈園は特別な存在と見なすことができる。沈園にある亭台楼閣と小橋流水の景勝は他の私家園林にも普通に見られるが，陸游が残した「釵頭鳳」及び唐氏との離別を残念に思う物語が語り継がれているため，沈園は現在に至っても紹興の著名な遊覧地としてよく知られる。

もう一つ注目すべきは新昌県である。宋代の紹興府内において教育に対して熱心な地域となり，この雰囲気は当地の私家園林の構造や機能に溢れている。また，新昌県には仏教や道教に関係する有名な山が多く，晋代から唐代に至って，数多くの著名な僧侶や文人の足跡が残された。宋代における仏教や道教の文化と私家園林の影響関係については，結びつきを明確に窺わせる史料を確認できなかったが，紹興の私家園林を彩る一要素である可能性は高く，今後の研究課題としてお

きたい。

また，北宋から南宋への歴史的転換が私家園林にどのように関わってくるのかについて最後に述べておきたい。史料の制約という問題もあるが，陸佃の「適南亭記」に書かれているように，華麗にして，まるで屏風絵のように精巧な雰囲気であった杭州とは異なって，壮麗な景色は紹興の特徴であった。それ故，紹興の私家園林は自然山水に頼る場合が多かった。南宋に入ると，紹興の行政的地位が上昇し，皇族や士大夫たちの移住に伴い，私家園林の営造が盛んになったと想定できる。事例は少ないものの，沈園と王爚の王氏園からその様子を窺うことができる。城内にある沈園は南宋においてすでに名園となり，陸游や皇族がよく遊覧に来ることもあり，沈園の景色は他所の比ではない華やかな私家園林であったと思われる。一方，王氏園は明らかに贅沢な私家園林である。松石を集めて「康干石林」という奇岩景勝を園林に設置することは紹興のなかでもひときわ耳目を集めた。特殊な事例になるかもしれないが，南宋において，紹興の私家園林は次第に贅沢な方向に向かうこととなる。また，陸游，章一経などの事例を見ると，私家園林に蔵書室を設置していることからも，南宋紹興の蔵書文化が私家園林の構造に影響したと考えられる。

紹興を蘇州や湖州と比べると，三者とも南宋においては首都杭州を取り囲む「京畿」に位置する重要な地域であった。また，風光明媚で，ともに蔵書文化を有する都市である。私家園林を見ると，宋代紹興の私家園林は蘇州や湖州さらには杭州のような知名度の高い存在ではない。蘇州や湖州は太湖に近いため，太湖石に代表されるような奢侈品を追求する。しかしながら，紹興は質朴な気風で，自然風景に頼る傾向がある。また，園林主を見ると，湖州の私家園林は，皇族，四川移民が園林主であったり，蘇州の私家園林は士大夫や退職官僚が多く占めていた。紹興の場合は士大夫と教育家が主体となっている。また，南班宗室が居住したという記載も見られるように，皇族が園林を築いていた可能性もある。こうした問題は今後，明清代の族譜や筆記小説を検討することによって明らかになる可能性があるが，現段階での調査では，以上の諸点を指摘するにとどめておく。

表 1　園林表

	名称	時間	人物	類型	出典	場所	特記
①	小隠山園	北宋	王氏（前） 陸宰（後）	私家園林 別荘	『嘉泰会稽志』巻十三「園池」	紹興城西南九里鏡湖中	四面皆水，奇葩珍樹，如楼閣之在煙雲中
②	斉氏家園	北宋	斉唐	私家園林	『嘉泰会稽志』巻十三「園池」	城東少微山	近湖，可識尽湖山登覧之盛。後廃為神祠
③	石皷書堂	北宋	石亜之 （太常博士）	読書処	『成化新昌県志』巻九「第宅」	新昌県西石皷山之陽	其父石待旦建有石渓義塾
④	五雲亭	北宋	章岷		『康熙山陰県志』巻六「古蹟志」	臥龍山東峯	面渓流，対若耶
⑤	適南亭	北宋	僧 用和		『嘉靖浙江通志』	城外梅山上	陸佃作記
⑥	陸左丞園	北宋	陸佃		『嘉泰会稽志』	臥龍山麓	三汲泉在園内
⑦	曲水園	北宋			『宋詩拾遺』巻二 賈昌朝「曲水園」		
⑧	石氏山斎	北宋			『万暦紹興府志』巻九「古蹟志一」	新昌	晏殊有詩「留題越州石氏山齋」
⑨	沈園	南宋	沈氏	私家園林	『万暦紹興府志』巻十「古蹟志二」	府城内，禹迹寺南	陸遊與唐氏故事
⑩	修竹楼	南宋	王英孫 （監簿）	私家園林	『万暦紹興府志』巻九「古蹟志一」	対秦望山	林徳賜詩
⑪	不礙雲山堂	南宋	陳策 （中訓郎）	読書処	『万暦紹興府志』巻九「古蹟志一」	上虞県	
⑫	千岩亭	南宋	陸宰		『老学庵筆記』巻一	会稽斜川橋中正坊	
⑬	快閣	南宋	陸游		『嘉慶山陰県志』	山陰県西門外	
⑭	三山別業	南宋	陸游	私家園林	『詩稿』巻三十二	城西鏡湖北岸三山，山陰三山西村	妻王氏居住
⑮	王家園	南宋	王爚（丞相）	私家園林	『成化新昌県志』巻九「第宅」	新昌県南長潭之上	居第極盛

⑯	愛山亭	南宋	黄度（礼部尚書）	私家園林	『成化新昌県志』巻九「第宅」	新昌県東孟塘山	娯親之所
⑰	黄氏山堂	南宋	黄庭（教授）	私家園林	『成化新昌県志』巻九「第宅」	新昌県南百許歩	
⑱	平波書堂	南宋	黄庚（觀察官）	読書処	『成化新昌県志』巻九「第宅」	新昌県北一里	
⑲	平山書堂	南宋	章一経（儒者）	読書処	『成化新昌県志』巻九「第宅」	新昌県西独秀山麓	
⑳	水竹所	南宋	陳雷（参軍）	私家園林	『成化新昌県志』巻九「第宅」	新昌県平壺桂山	於平壺之西一里建有義塾
㉑	姚山別業	南宋	孫子秀	私家園林	「孫炳炎題元実子秀字弟」		
㉒	寿康精舎	南宋	董伯和	私家園林	「跋舒舜侯岳祥寿康精舎記」		
㉓	昌園	南宋		私家園林	『嘉泰会稽志』巻十八「拾遺」	県東南二十里	有梅万余株，居人以梅為業
㉔	五雲梅舎	南宋	王氏（王梅山）	私家園林	『万暦会稽県志』巻十五「古蹟」	城東去五雲門東南十里	林景熙有記，累土為山，種梅百本，與喬松修篁為歳寒友
㉕	朱通直荘		朱氏	私家園林	『嘉泰会稽志』巻十七「草部」	昌安門内	佳菊数十種，樹高三，四丈
㉖	渉趣園	宋	石茂誠	私家園林	『成化新昌県志』巻九「第宅」	新昌県西状元坊右	

【注】

1．李浩『唐代園林別業考論』西北大学出版社，1998 年 10 月。
2．張斌『紹興歴史園林調査與研究』浙江農林大学碩士学位論文，2011 年 6 月。
3．呉立威『紹興市園林発展与特色的研究』中南林学院環境芸術設計学院碩士学位論文，2003 年 6 月。
4．邱志榮『紹興風景園林与水』学林出版社，2008 年 10 月。
5．（宋）陸游『渭南文集』巻第十四，会稽志序。
6．『兩宋名賢小集』（文淵閣四庫全書本）巻七十三，藜齋小集。「鏡湖」亦名鑑湖，任昉「述異記」，軒轅氏鑄鏡湖邊，因得名。或云黄帝獲寶鏡焉。或又云本王逸少語「山陰道上行，如在鏡中遊」故名。
7．（唐）房玄齢，（唐）李延壽撰『晋書』（中華書局，1974 年 11 月。）巻九十二，列傳第六十二，文苑，「顧愷之」。千巖競秀，萬壑爭流，草木蒙籠，若雲興霞蔚。
8．李永鑫主編『紹興通史』（浙江人民出版社，2012 年 10 月）陳国燦，王遥江著第三巻第三章「宋代的紹興」，p. 455。
9．（宋）沈作宴修，（宋）施宿等纂『嘉泰会稽志』（『宋元方志叢刊』第 7 冊，中華書局，1990 年 5 月）巻十六「蔵書」。
10．同巻「求遺書」。
11．同上。
12．陸游『渭南文集』巻第三十六，「朝奉大夫石公墓志銘」。
13．陳從周『説園』中国建築工業出版社，2007 年 4 月。
14．以下は拙稿「宋代園林研究の現状と課題」『人文研究』第 69 巻，2018 年 3 月に基づく。
15．曹林娣『中国園林文化』中国建築工業出版社，2005 年 5 月，p. 3。
16．李浩『唐代園林別業考論』西北大学出版社，1998 年 10 月。
17．（清）王学棟纂修『新剡瑯琊王氏宗譜』乾隆五十四年本。
18．（梁）昭明太子撰，川合康三ほか訳注『文選』（岩波書店，2018 年 1 月）詩篇四，巻二十五，「登臨海嶠初發彊中作與從弟惠連見羊何共和之」。
19．（唐）李白『李太白集』（汲古書店，2006 年 2 月）巻十三，「夢遊天姥吟留別」。
20．『嘉泰会稽志』巻九，「山」。
21．『嘉泰会稽志』巻一，「風俗」。
22．范鳳書『中国私家蔵書史』（大象出版社，2001 年 7 月）第二篇第一章「宋代的私家蔵書」。
23．『嘉泰会稽志』巻十八，「拾遺」。
24．（宋）陳鵠『耆旧続聞』（『澗泉日記・西塘集耆旧続聞』宋元筆記叢書，上海古籍出版社，1993 年 9 月）巻十，「余弱冠客會稽，遊許氏園，見壁間有陸放翁題詞，云「紅酥手，黄縢酒，滿城春色宮牆柳。東 風惡，歡情薄，一懐愁緒，幾年離索。錯錯錯。春如舊，人空瘦，涙痕紅裛鮫綃透。桃花落，閑池閣，山盟雖在，錦書難托。莫莫莫」。筆勢飄逸，書於沈氏園辛未三月題。放翁先室内 琴瑟甚和，然不當母夫人意，因出之。夫婦之情，實不忍離。後適南班士名某家有園館之勝。 務觀一日至園中，去婦聞之，遣遺黄封酒果饌，通慇懃。公感其情，爲賦此詞。其婦見而和之，有「世情薄，人情悪」之句，惜不得其全闕。未幾，怏怏而卒。聞者爲之愴然。此園後更許氏。淳 熙間，其壁猶存，好事者以竹木來護之。今不復有矣。」（（宋）劉克荘『後村詩話』（中華書局，1983 年 12 月）続集巻二，（宋）周密『斉東野語』（唐宋史料筆記叢刊，中華書局，1997 年 12 月）巻一，「放翁鐘情前室」もほぼ同じような記載がある。）
25．鄒志方『陸游研究』（人民出版社，2008 年 10 月）第二章「陸游住所」。
26．（宋）趙蕃撰『淳熙稿』（文淵閣四庫全書本）巻十九，「歩沈園」。

27. 陸游『渭南文集』巻第四十九，「釵頭鳳」。
28. 陸游『剣南詩稿』巻二十五，「禹跡寺南有沈氏小園，40年前，嘗題小闋壁間，偶復一到，而園已易主，刻小闋於石，讀之悵然」。巻六十五「十二月二日夜夢遊沈氏園亭」。
29. 拙稿「宋代的園林与交遊 －以湖州園林為線索」『都市文化研究』第21期，2019年3月，p. 32。同「宋代蘇州園林与士人的交遊」『人文研究』第71巻，2020年3月，p. 43。
30. 陳鵠『耆旧続聞』巻十。
31. 参照（美）賈志揚著，趙冬梅訳『天潢貴胄：宋代宗室史』江蘇人民出版社，2005年10月。
32.『嘉泰会稽志』巻十三，「斉氏家園」。
33.（清）陸心源『宋史翼』（中華書局，1991年12月）巻二十六列伝第二十六による。
34.（宋）陸佃『陶山集』（文淵閣四庫全書本）巻十一，「適南亭記」。
35.『嘉泰会稽志』巻十三，「小隠山园」。
36.（宋）孔延之編『会稽掇英総集』（『宋元浙江方志集成』第14冊，杭州出版社，2009年6月）巻二十，『游小隠山叙』「望其門，如楼閣之在煙雲中。入其堂，登其亭，廓然如形骸之出塵。世外山蒼，谿碧繚繞，四注皆可襟迎而袖揖。竒葩珍樹，映帯滿前。」
37.『嘉泰会稽志』巻十三，「小隠山园」。
38. 包偉民「陸游的「鄉村世界」」『武漢大学学報（哲学社会科学版）』，第1期，2019年12月。
39. 鄒志方『陸游研究』人民出版社，2008年10月。邱志榮『紹興風景園林與水』学林出版社，2008年10月。陳楚文，黄杉姍「陸游三山別業考」『建築与文化』第6期，2017年6月。包偉民「陸游的「鄉村世界」」『武漢大学学報（哲学社会科学版）』第1期，2019年12月等。
40. 陸游『渭南文集』巻第二十，「居室記」。
41. 陸游『渭南文集』巻第十八，「書巣記」。
42. 陸游『剣南詩稿』巻十五，「冬夜読書」。
43. 陸游『剣南詩稿』巻三十三，「題庵壁」。
44. 剡曲は山陰三山別業の東側の韓家山（陸遊詩中常称東山）のふもとにあった小川である。（参照鄒志方「陸詩地名釈疑」『紹興文理学院学報』第20巻第3期，2000年9月，p. 16。）
45. 参照鄒志方『陸游研究』（人民出版社，2008年10月）第二章「陸游住所」，第四節「三山別業」，pp. 79-108。
46. 脱脱『宋史』巻三百九十五，列传第一百五十四。
47. 陸游『老学庵筆記』巻一。
48. 山口智哉「宋代地方都市における教育振興事業と在地エリート －紹興新昌県を事例として－」『都市文化研究』第9巻，2007年3月，pp. 34-53。
49. 李永鑫主編『紹興通史』（浙江人民出版社，2012年10月）陳国燦，王遥江著第三巻第三章「宋代的紹興」参照。事功之学について説明しておく。南宋では，朱熹に代表される理学に対立し，「実際にあったことと実際の効果を互いに比較して評価する」，「学問は必ず国事に良い」というような特徴のある事功思想が浙東で流行した。その中，陳亮（1143－1194）を代表にする「永康之学」，唐促友(生卒不詳)を代表にする「経制之学」，薛季宣（1134－1173），陳傅良（1137－1203），葉適（1150－1223）を代表にする「永嘉之学」が，後世になって南宋浙東事功学派と呼ばれる。
50.（宋）孔延之編『会稽掇英総集』（『宋元浙江方志集成』第14冊，杭州出版社，2009年6月）巻十二。
51.（明）李楫修，（明）莫旦纂『成化新昌県志』（上海図書館蔵稀見方志叢刊，第106冊，国家図書館出版社，2011年9月）巻九，「第宅」。「石皷書堂，在縣西石皷山之陽，宋太常博士石亞之讀書之所。嘗遇異人，遺以丹藥，不敢服，投之池中，隨有蓮開魚躍之異」。
52.（清）石右軍等『南明石氏宗譜』（清乾隆五十年慶雲祠木活字本）巻之一，「記」。
53.『成化新昌県志』巻九，「第宅」。
54. 参照脱脱『宋史』巻四百一十八，列伝第一百七十七。
55.（唐）杜佑撰，王文錦等点校『通典』（中華書局，1988年12月）巻一百九十九，辺防十五，北狄六，拔野古，「拔野古者，亦鐵勒之別部。在僕骨東境，勝兵萬餘。其地豊草，人皆殷富。其酋俟利發屈利失，貞觀二十一年舉其部來降。其地東北千餘里曰康干河，有松木入水，二年乃化為石，其色青，有国人居住，其人謂之「康干石」。其松為石以後，仍似松文。人皆著木腳，冰上逐鹿。以耕種射獵為業。国多好馬，又出鐵。風俗與鐵勒同，言語稍別。」
56.『成化新昌県志』巻九，「第宅」。
57. 同上。
58.（明）田琯纂『万暦新昌県志』（天一閣蔵明代方志選刊，上海古籍書店，1981年12月）巻十一，「鄉賢志」。
59.（清）石右軍等『南明石氏宗譜』巻一，「原序」，「記」。
60.『万暦新昌県志』巻三，「山川志」。

（大阪市立大学大学院文学研究科 大学院生）
【2020年8月28日受付／2020年11月6日受理】

The Gardens of Shaoxing and Activities of Living during the Song Dynasty

Hanqi ZHUANG

Shaoxing is a city located in Jiangnan, which has been developing well and has a long history and unique culture. The Zhedong Canal land development and water transportation have brought Shaoxing a prosperous economy. Beautiful natural scenery and famous scenic spots are perfect agents for promoting the development of the private gardens in Shaoxing. The history of the gardens started from the Spring and Autumn period and after the development of Six Dynasties, it reached the flourishing period for private gardens at the end of the Ming dynasty. During the Song dynasty, especially in the Southern Song Dynasty after the south move, when Shaoxing became an important political and economic center, the private gardens have not yet been fully examined.

This paper examines the characteristics and garden functions of Shaoxing's private gardens in the Song Dynasty, and I have drawn some conclusions as follow below. Shaoxing, which was not only the center of Zhedong (the eastern area of Zhejiang) in the Southern Song dynasty but also was the site of the imperial mausoleum, had highly developed traffic, including the popular culture of Buddhism and collections of books. Many of the private gardens were concentrated in Kuaiji County (会稽県), Shanyin County (山陰県), Xinchang County (新昌県), based on my work on reorganizing the data of the private gardens. The common feature was that these gardens all relied on the natural scenery. Xinchang County, as a region in Shaoxing province, is keen on education and we could know that passion from the structures and the functions of the local private gardens. A private gardens such as Shenyuan, famous for its love story, has become a representative of Shaoxing's private garden and is now a famous tourist attraction. All these private gardens are closely related to characteristicss of Shaoxing gardens mentioned above, and to the developed economy and culture of Southern Song Dynasty.

Keywords：Shaoxing during the Song dynasty, private gardens, the activities of living, the culture of collecting books, the business of education